

平成 22 年 5 月 14 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19330119

研究課題名（和文） 知の構造変動に関する理論的・実証的研究

研究課題名（英文） Theoretical and empirical research on structural changes in knowledge

研究代表者

那須 壽（NASU HISASHI）

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：40126438

研究成果の概要（和文）：

「知の在り方・有り様が変わりつつある」という日常の実感（仮説）を導きの糸として、25 大学 40 年間の社会学関連シラバスに関する調査と、社会学の教育と研究に関する質問紙調査を立案・実施し、分析した。これら二つの調査研究は「知の社会学」の構想の一環であり、今日、多くの人びとによって実感されている（であろう）「知」の在り方・有り様の「変化」を見定める第一歩として、社会学知における変化をいくつかの側面から明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This research was projected as a part of “sociology of knowledge,” which expected to explore structural changes in knowledge of science, everyday knowledge, and the relationship between them. Two surveys were conducted; a survey of syllabuses for sociological education in 25 universities for the past 40 years and a questionnaire survey addressed to sociologists in Japan. Through these surveys, several aspects of changes in sociological knowledge have been identified.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	4,500,000	5,850,000	10,350,000
2008 年度	1,400,000	1,820,000	3,220,000
2009 年度	1,200,000	1,560,000	2,760,000
総計	7,100,000	9,230,000	16,330,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学（3801）

キーワード：知識社会学、日常知、学知、シラバス、学知の伝達、レリヴァンス

1. 研究開始当初の背景

「知」の在り方・有り様が根本的に変わってきているのではなかろうか。しかもその変化は、「知」の累積可能な内容のみに関わる変

化であるにとどまらず、さらにそれを超えた、より根源的な構造上の変化なのではなかろうか。また、そうした「知」の在り方・有り

様の変化は、様々な領域にまでおよんでいるのではなからうか。本研究を背後で支えているのは、第一に、われわれ研究グループの全メンバーが共有しているそうした日常的「実感」であった。これを、単なる日常的「実感」にとどめることなく、この実感の拠って来るところを確かめ、同時に、「知」の変化の有様を、資料・データに拠りながら見定め、そのことを通して社会の変化の有様をも見定める、そのための第一段階として、「社会学知」の変化の有様を見定めるために企画されたのが本研究である。したがって第二に、本研究は、社会によって紡ぎ出された「知」は、今日、社会の在り方、人と人との関係の在り方を規定する要因として、ますますその重要性を増しつつあるという、われわれ全メンバーの「知の社会学」へ関心によっても支えられており、さらに第三に、「学知」（「社会学知」）の変化に視点を限定した本研究は、「日常知」の変化の有様を見定める研究へと展開され、そのうえで両者の関係についての考察へと展開されるという展望をもって進められた。

2. 研究の目的

前項で述べたような全体的構想のもとに、本研究ではその第一段階として、(1) 大学という教育の場でいかなる「社会学知」が伝達されようとしていた・いるのかを時系列的に確認し、その通時的変化を確認すること、(2) 「社会学知」の生成・伝達・発信のすべての過程に携わっている当事者たちが、自らの「学的活動」をいかなるレリヴァンスに依拠しながら組織化しようとしていた・いるのか、今日の「学知」の（変化）の在り方にいかなる眼差しを向けていた・いるのか（主観的側面）そして実際には、どのように自らの「学的活動」に関わっていた・いるのか（客観的側面）

を、質問紙調査によって明らかにすること、(3) これらの調査結果を相互に関連付けながら、「社会学知」の変化の在り方と有り様を見定めること、が目指された

3. 研究の方法

(1) 伝達される「社会学知」の調査研究：伝達されようとしている「社会学知」とその変化を確認するためにわれわれが着目したのは、「講義要綱（シラバス）」であった。全国の主要大学のシラバスを収集し、いかなる「社会学知」がいかなる仕方で伝達されようとしているのかを、過去に遡って確認し、そこに時系列的な変化が認められるのかどうか、認められるとすれば、それはどのような変化なのか、を確認することにした

(1-1) 対象大学の選定：(a) 「エリート型」「マス型」「ユニバーサル型」（・トロウ）という、教育社会学でほぼ定説になっている高等教育機関の変化の全過程をカバーできる可能性に道を開いておくこと、(b) 教員がシラバスを書く際に、自分の研究領域、関心領域を反映させる余地が残されていることという、本プロジェクトのそもそもの問題関心に照らして重要であると思える基準に合致させるために、原則として、1965年の時点で社会学部または社会学科、あるいは社会学専攻（専修）として社会学教育を行っていること、

4～5名以上の社会学教員が専任として同一学部・学科・専攻・専修に所属していること、という二つの基準を同時に満たす大学を選んだ。その結果が、下記の25大学である（ただし、調査の過程で、古いシラバスはどこにも保存されていないということが判明するケースもあり、したがって、すべての調査対象大学で1965年以降のシラバスが収集できたわけではない）。

【調査対象大学】

北海道大学文学部、東北大学文学部、東京大学文学部、筑波大学（東京教育大学）文学部・第一学類、千葉大学文学部、名古屋大学文学部、京都大学文学部、大阪大学文学部・人間科学部、九州大学文学部、首都大学東京（東京都立大学）人文学部・都市教養学部、慶応義塾大学文学部、上智大学文学部・総合人間科学部、成蹊大学文学部、中央大学文学部、東洋大学社会学部、日本大学文理学部、明治学院大学社会学部、法政大学社会学部、立教大学社会学部、早稲田大学第一文学部、同志社大学文学部・社会学部、立命館大学産業社会学部、関西大学社会学部、関西学院大学社会学部

(1-2) 「社会学関連科目」の選定：可能な限り広範囲に収集するという方針のもと、原則として、以下の条件に当てはまるすべての科目のシラバスを収集することにした。(a) 科目名か副題に社会学あるいはそれに類する用語を含んでいる 一般教育科目、対象学科・専攻・専修の専門科目、(b) 科目名にも副題にも社会学という用語は含まれないが、シラバス記載事項から判断して明らかに社会学関連科目と判断できる、対象学科・専攻・専修設の専門科目。

(1-3) 調査対象大学へ出かけて、関連科目の記載事項をコピーするなどして収集したシラバスは、順次、データ・ベース化し、メンバー各自の問題関心に従って、全体的な動向や個別科目に着目しながら、また特定の視点から関連シラバスを読み込みながら、量的・質的な分析を行った。

(2) 社会学教員に対する社会学の教育・研究に関する質問紙調査による研究：

(2-1) データ収集の方法と母集団：日本社会学会の会員名簿を用いた郵送法による全数

調査を実施した。

(2-2) プリテストと調査票：メンバー全員が、それぞれの問題関心から質問と選択肢等を作ってそれを持ちより、何度も議論を重ねたうえでプリテスト用の調査票を作成し、メンバーの友人・知人の社会学教員（日本社会学会非会員も含む）50人を対象にプリテストを実施し（2001年1月）。対象の選定にあたっては、年齢、性別、勤務形態、所属大学の所在地に配慮し、可能な限りバランスが取れるように配慮した（回収32票、回収率64.0%）。そこでの回答状況を分析したうえで、調査票を若干、手直しして本調査用の調査票を作成した。ただし、大幅な修正の必要性はなかったため、プリテストでの回答も、本調査の回答と同列に扱うことにした。

(2-3) 本調査とデータの分析：日本社会学会の一般会員から、プリテストの対象者を除いた2,542名全員を対象に、2009年2月から3月にかけて本調査を実施した。発送作業と回収票の整理は、メンバー全員で手分けして行った。データ入力に外注した。回収率は28.9%（734票）であった。先に実施したプリテストの回収票と合わせると、今回の調査の回収率は29.9%（配布2,592票、回収766票）であった。外注した単純集計表をもとに、それぞれの関心からいくつかのクロス集計を試み、各自が分析にあたった。

4. 研究成果

(1) 本研究から得られた結果は、まず日本社会学会の大会で報告し、さらにそれを拡大する形で、また新たなテーマのもとにメンバーが論文を書き、報告書の形にまとめて2009年3月に刊行した。以下、二つの調査研究から得られた知見のいくつかを挙げておこう。

(2) 伝達される「社会学知」の調査研究：シラバスという資料は、明示的にであれ

暗黙のうちにであり、じつは多くのことを語っている。本研究を構想した当初は、シラバスに記述されている「講義概要」という、いわば「内容」に関わる側面にもっぱら着目した分析についてだけ考えていたが、過去 40 年間のシラバスに実際に接していくなかで、その「形式」の変化もまた重要なデータであることに気付いた。たとえば記載内容や項目のフォーマット化、半期 15 回の授業計画の明示化、「試験**パーセント、レポートパーセント、出席状況××パーセント」といったように、パーセンテージまでもが記載されている「成績評価の仕方」の明示化など、昨今ではむしろ一般的になっているとあってよい、「講義概要」以外の側面も、「社会学知」の伝達に関わる「メタ・メッセージ」として重要な役割を果たしており、したがって伝達される「社会学知」の変化について考えていくうえ重要なデータである。この側面は、今後、日常知の変化というテーマへと本研究を展開していく際には、さらに重要なものとなってくるだろう。

調査対象 25 大学 (国公立 11 大学、私立 14 大学) 40 年間の専門科目 70,437 科目を鳥瞰的に眺め、特定のキーワードを軸に「開講率」に着目しながら全体的な動向を探ってみることによって、長期的にみて開講率の増減幅の少ない「安定型」(調査分野、地域分野など)、開講率が低下している「減少型」(農村分野、人口分野など)、開講率が上昇している「増加型」(家族分野、国際分野など)、近年になって新たに開講されるようになった「新設型」(情報分野、環境分野など)、一時期、低下した後、ある時期から上昇している「復活型」(歴史分野、労働分野)という 5 つのタイプが明らかになった。

個別分野についての分析からも、いくつ

かの知見が得られた。たとえば「外書講読」系科目に関して、外国語の文献を講読する際の狙いが、「社会学知」に照準したのから「読解知」に照準したものへと変化している様をはっきりと確認することができた。また、「社会学史」系科目に特化した講義概要の解読・分析を通して、70 年代前半までは、「地域」という観点を軸に講じられている「社会学史」が、70 年代後半からは「時代」を軸に講じられることが常態になっている様を確認することができた(「社会学概論」系科目に関する分析からも、教育と研究の関係に関する興味深い知見が導かれているが、割愛する)。

シラバスにおいて「担当教員」と「受講生」の一方または両方を指すために用いられている「一人称複数(「われわれ」「私たち」など)の用いられ方と使用頻度に着目し、収集した全シラバスを対象に分析した結果、「一人称複数」の使用頻度が増加していること、その用法には、「社会学知の主体」を指す場合と「日常知の主体」を指す場合の二通りがあり、さらに後者は、「<私たち>の日常知と社会学知を対比する用法」「<私たち>の日常知そのものにアプローチする用法」「<私たち>と社会学知の関係それ自体を主題化する用法」の三通りに区別できることが明らかになり、さらに、社会学者が社会学のもつ再帰的な性格について自覚的になってきているという事態が明らかになった。

(3) 社会学教員に対する社会学教育・研究に関する質問紙調査研究:

「授業とシラバスについて」「教育と研究について」「研究について」という三本柱から構成された 47 問(フェースシート項目と本調査に関する意見を問う項目を含む)から成り立っている本調査から得られたデータを

読み込む作業は、いまだ進行中ではあるが、これまでの分析からも、多くの興味深い知見が導き出されている。

たとえば、研究活動に関するレリヴァンスを示していると想定される変数と、教育活動に関するレリヴァンスを示していると想定される変数をいくつかの問いのなかから選び出すことによって、当事者たちが社会学の研究と教育にどのような態度で取り組んでいるのか、その傾向を世代ごとに明らかにすることが試みられた結果、以下のような知見が導かれた。() 世代が下がるにつれて、概して(a)社会に貢献する方法として「市民活動への参画」を望ましいと考える傾向が上昇し、(b)学術論文を書く際に、「古典的諸著作」への依存度が低下し、「質的データ」への依拠度が高まり、読者として「テーマの関係者」を想定する割合が低くなり、日常知と科学知の違いを「知識の洗練度」という点には求めない傾向が上昇する。() 50 歳代には、(a)「研究」よりも「教育」を通じた社会貢献を肯定し、マス・メディアの積極的な利用を肯定する傾向が強く、(b)「社会学以外の分野の学会への所属」が目立つ、というコーホート特性が見られた。

自らが携わっている(携わった経験のある)教育と研究について尋ねた問いへの回答と、学生時代に良く読んだ本と、研究において自分が影響を受けたと思う研究者について尋ねた問いへの回答とに着目することによって、日本の社会学におけるウェーバーの圧倒的な影響力が明らかになり、またそれらの回答と世代とを関連付けることによって、世代が若くなるにつれて、「一般理論」「社会哲学・社会思想・社会学史」「農山漁村・地域社会」「社会変動」「生活構造」といった分野での研究者の割合が低くなり、他方、「コミュニケーショ

ン・情報・シンボル」「性・世代」「社会学研究法」「社会心理・社会意識」「差別問題」といった分野での研究者の割合が増えていること、また、教育の分野に関してもこれと同一の傾向が観られることが明らかになった。

(4) 以上で概述した本研究の研究成果だけからでも、これまで単なる実感としてしか語られたことがなかった「社会学知」の変化の一端が、はっきりとした根拠をもって語ることができるようになった。だが「知の構造変動」の有り様を明らかにし、そこから照射される社会の在り方・有り様の変化を見定めるためには、残された論点は数多くある。実際、これまでに解読してきた以外の多くの情報がシラバスには盛り込まれているし、質問紙調査から得られたデータにしても、その多くは解読の前に開かれたままである。今後、手持ちのデータのより緻密な解読・分析を進める一方で、すでに着手している学会誌掲載論文と学会報告研究をさらに進展させ、また同時に、学知の生成・伝達・発信を直接・間接に規定していると推測できる文部行政、科学技術行政、学術関係機関の実態調査へと射程を広げ、またいうまでもなく、新聞・雑誌等を媒介にした「日常知」の実態分析へも歩みを進める予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

調査報告書『知の構造変動に関する理論的・実証的研究』(2010年3月)を刊行した。所収論文は以下の通り(すべて査読なし)。

1. 那須壽「序論：知の社会学プロジェクトの概要と今後の展望」1-10頁
2. 木村正人「シラバスにみる社会学知の変遷 - 分野別開講状況と科目名の動向」11-32頁

- 3.大黒屋貴稔「外書講読にみる学知の変遷 - 社会学知から読解知へ」33-43 頁
- 4.大黒屋貴稔「社会学史科目にみる学知の変遷 - 地域史から通史へ」44-54 頁
- 5.河野憲一「社会学知の前景 - 知の変動の場としてのシラバス」55-84 頁
- 6.関水徹平・飯田卓「シラバスにみる社会学知と日常知の関係 - 人称複数の分析から」85-94 頁
- 7.関水徹平「社会学知に関するレリヴァンスの違い - 世代に着目して」95-109 頁
- 8.草柳千早「活動としての社会学、その構成過程への一視角」111-137 頁

〔学会発表〕(計5件)

第81回 日本社会学会大会 (2008年11月23日:東北大学) において、以下の報告をした。

- 1.那須壽 「講義要綱(シラバス)にみる学知の変遷 (1):研究の全体的概要」
- 2.木村正人・大貫恵佳 「講義要綱(シラバス)にみる学知の変遷 (2):分野別開講状況と科目名の動向」
- 3.関水徹平・飯田卓 「講義要綱(シラバス)にみる学知の変遷 (3):社会学教育において「社会」を主題化する在り方の変容」
- 4.河野憲一 「講義要綱(シラバス)にみる学知の変遷 (4):一般教育科目「社会学」において次第に「語られなくなる」ことから」
- 5.大黒屋貴稔 「講義要綱(シラバス)にみる学知の変遷 (5):「原書講読」系科目で講じられる知の変遷について」

6. 研究組織

(1) 研究代表者

那須 壽 (NASU HISASHI)
早稲田大学・文学部・教授
研究者番号:40126438

(2) 研究分担者

草柳 千早 (KUSAYANAGI CHIHAYA)

早稲田大学・文学部・教授

研究者番号:40245361

土屋 淳二 (TSUCHIYA JUNJI)

早稲田大学・文学部・教授

研究者番号:80287937

榎本 環 (ENOMOTO TAMAKI)

駒澤女子大学・人文学部・専任講師

研究者番号:30449285

(08年度:連携研究者/09年度:研究協力者)

河野 憲一 (KAWANO KEN'ICHI)

東洋大学・社会学部・非常勤講師

研究者番号:30409586

(08 09年度:研究協力者)

飯田 卓 (IIDA SUGURU)

早稲田大学・文学部・助手

研究者番号:70506138

(08 09年度:研究協力者)

木村 正人 (KIMURA MASATO)

早稲田大学・文化構想学部・助教

研究者番号:80409599

(08 09年度:研究協力者)

大貫 恵佳 (OONUKEI SATOKA)

駒澤女子大学・人文学部・非常勤講師

研究者番号:00421214

(07年度:研究協力者)

関水 徹平 (SEKIMIZU TEPPEI)

早稲田大学・文化構想学部・助手

研究者番号:40547634

(09年度:研究協力者)

(4)研究協力者

大黒屋貴稔 (OOGUROYA TAKATOSHI)

武蔵大学・人文学部・非常勤講師